

【エッセイ】小学生は5年生、6年生になると、授業以外に委員会活動を行います。焼津市内のある学校には、福祉環境委員会という委員会があり、年間を通して、子どもたちが福祉や環境問題について考え、活動しています。歳末助け合いなどの手伝い、全校児童全員に車椅子の使い方などを伝える体験会、ペットボトルや牛乳パックを楽しく集める方法の提案などを主な活動として、子どもたちは福祉や環境問題に真剣に取り組もうとしています。そんな子どもたちに「福祉って何ですか」と訊くと、困っている人を助け幸せになってもらうことだと答えます。熱心に活動に取り組んでいる子ほど、素早く、そう答えます。これは正しい答えですが、一つ付け加えて教えなければなりません。それは、助けられた人だけでなく助けた人も幸せになることが必要だということです。多くの小学生は大変素直で、「困っている人を助けましょう」と教えると、自分の身を犠牲にしてまで人を助けようとします。もちろん、その苦労は大事な体験として後の人生に役立ちますが、これでは福祉とは呼べません。「福」も「祉」も幸せ、すなわち、二つの幸せが重なって、初めて福祉と言えるのです。極端な例ですが、喉が渴いて死にそうなる時、同じ状態の人が最後の一口の水を自分に与えてくれようとするのを喜んで受け取ることにはできません。差し出してくれた相手の水が豊富にあって、にっこりと笑って差し出してくれるから、心から感謝して受け取れるのです。福祉で最も重要なことは、相手も自分も同じように幸せになることです。困っている人のお手伝いをする時に、相手の人よりもお手伝いをしている自分の方が幸せな気持ちで幸せな顔をしているのなら、最高の状態です。小学生には、ただ、「困っている人のお手伝いができる人になりましょう」と教えるのではなく、「世界一幸せな人になりましょう。困っている人がいたら、その人が自分と同じくらい幸せになるようにお手伝いしましょう」と教えたいと思います。